

舞台を観終わって数日を経た今では、あの空間がすべて、脈絡なく継ぎ接ぎされたいわば走馬燈のようなものだったかのように思われる。いや、継ぎ目の強引さという点では、もしかするとテレビのチャンネル切り替えといったことにより近かったかもしれない。

作品の中に流れている物語は当然、別に私の話なわけではないんだけど、どこか、例えば自分の人生の走馬燈であるかのような、かつて両目から見ていた光景を、記憶を、もう一度思い起こしているかのような、そんな錯覚に、気付けば陥っていた。いくつもの場面＝記憶の、その登場する順序に関して、とくには意味を見出せない、というところが、走馬燈やあるいは夢の中のままならなさに似ていた（考えてみると、『えのえを なれあて』というタイトルはかなり適切だったと思うが、中身との有機的な繋がりが感じられなかったのはなぜだろう？まず今に至るまでタイトルの由来に関心を持たされることがなかった…。舞台上では役者が、まさにその名の通り、様々な役を担う。私の記憶の中で思い起こされる、通りすがってきた多くの人々の顔に、そういえば彼ら（役者たち）の顔は似ていたような気がする。…これは別に詩的なことが言いたいというのではなくて…軽やかに転じていく彼らの様々な役柄が、彼ら役者たち個々の、元来持ち合わせている個性というものを上手く使い回すことで生命力を帯びていっている様子が、名前も忘れてしまった私の過去の中の人々の顔の性質とよく似ているのだ。つまり、両者ともに、私個人にとってはとくに思入れのない群衆である一方で、彼らは紛れもなくひとつひとつの人生を持った個々人なのである。無数の人生を、たった8人の役者が転々と、次から次へと生きていく。多いのか少ないのか正直判断がつかないのだけれど、この8人という人数が、個人が一生の中で出会う無数の人々の顔を次々とファイリングしていっているようにも見え、この演劇全体が、そういう意味でも…人生の清算？といったような機能を果たすものとしての、走馬燈に似ているように、感じられたのだ。

ここで突然、人生の清算などという言葉を持ち出したのは、この作品が彼ら8人の、現在ここまでの演劇活動へのひとまずの清算行為であるように見受けられたからである。（とはいえ、所詮これは憶測にすぎず、何も断定的に言えないということで、とくには言及する余地がないのだが。）

一方で、作品構成というか、つくりそのものへの印象としては、上で「ままならない」と言ったけれど、このような見せ方であったことへの納得のようなものがほとんど無い、という部分がやたらと強く残っている。あえて例えるなら、無作為にチャンネルを切り替えながら、テレビの画面を茫然と見ているときのような、観る側にとってのどうしようもなさというか、そんな感があった。多分一種のオムニバス形式になっていたのだと思うけれど、端的に言うと、ひとつひとつにあまり一貫性がなかった。必然性もあつたようには思われない。いや、必然性は当然あつたからこのような構成に決まったはずだし、存在の否定をするわけではなくて、ただ、こちらに伝わるだけの力は持っていなかったらしい、ということかもしれない。もちろん、一貫した「(演劇への) 思い」みたいなものは、完全に、否応なしに受け取れる。しかしその方向性は、その情熱で同情を引くというか、そういう方に向けられていた。技術が非常に高かったので、個人的には、それを生かしてもっと戦略的に観客の感情喚起を誘導しても良かったのではないかと思う。最後に最初の物語を回収する程度では足りなかった。ラストに至るにつれて各意思が方々へ広がっていついてしまっていて、それを演劇への愛でやわく、やわく、包み込んで放任することに甘んじたという感もあった。多分、作品像をもう少し人為的に厳しく管理した方が、より切実に、むしろ観客の感情面に訴えられたのではないだろうか。傍ら、全体を統合する役割の専任担当を置かなかったという話を

きいて、でもそのことは、本質的には別に関係のないことなのでは？とも思う。確かにいると楽に達成できるはずだけれど、例えば今回この作品が、私の感じた通りの纏まりのないものになっていたのだとして、それはこのような演出手法を採ったこと自体に原因があるのではない気がする。方法論の面では、難しさは伴うけれどこのルートの先が見てみたい気持ちがある。

演劇は好きですか？と私たち観客に投げかける彼らの問いは、恐らくその時点で既にお門違いである。彼らが、演劇をする側の人間としての立場から、今まで演劇に費やしてきた人生におけるいくらかの時間について振り返ることと、例えば観ることによってのみ演劇に関わってきた人間が、演劇の時間について思索することは、随分と質感の違う話ではないだろうか。この質問が、どちらの立場をも含有した複合的な視点からのものである、と仮に彼らが主張したとしても、である。例えどう言われようと、綺麗ごとや理想論抜きに、我々観客にとって舞台上の様子は、テレビの中で起こっている他人事のようなものである。テレビよりは緊張を強いられるけれど、私たち観客は、依然として安全である…ぱっとチャンネルが、場面が切り替わるのを、その中で彼らが身体を疲労させていく様子を、傍観しているという立場に揺るぎは無かったのだから。ところで、そういえば、メタ演劇の要素があるにも関わらず、このように、観客という立場に危機感を持たせることなくメタを自然に咀嚼して使い込むことに成功していた点は、（当然そのままの良い意味合いで、）我々観客にエンターテイメント的な質を提供していたように思われるし、「演劇をすること」を扱ったこの作品が内包するテーマ的にかなり功を奏していた部分なのではないだろうか。しかし制作の上でそれが望まれていたかは皆目見当がつかない。

演劇は好きかと言われても私にはわからない。実際、この作品を観たあとで、とりわけ演劇への愛を自覚したような感というのも正直とくにはないし、演劇観が変わったというようなこともなかった。ただ、例えば私のような一観客に、第四の壁を越えて、本当の意味での生の感情のようなものを、ごく誠実なやり方で届けようとしていたと感じられたことで、作品そのものには個人的にかんがりの好感が持ててしまった。それは確実に、演劇が好きかどうかという問題とはもちろん関係なく、替えの効かないあの時間が、この作品が、持っていた無二の価値であるように思う。